

農民心性における「自尊」意識の変化

—戦間期バス＝ブルターニュ地方に関する試論的考察—

横 原 茂

はじめに

I バス＝ブルターニュ農村社会

II 農民の「誇り」と由緒

III 自尊意識の変化

おわりに

はじめに

本稿では、特集のテーマである「由緒」概念を手がかりにしながら、近代フランスにおける農民の「自尊」意識の変化について考察してみたい。

最初に、主たる史料として参照するピエール＝ジャケズ・エリアス『誇りという馬 *Le Cheval d'orgueil*』¹⁾について紹介しておこう。著者エリアスは、1914年にバス＝ブルターニュ地方のフィニステール県南部カンペール郡プルドルジク村に生まれた(次頁の図を参照)。長じるに及んで、カンペールのリセ・ラ＝トゥール＝ドヴェルニュ(中等学校)からレンヌ大学に進学して、フィニステール師範学校の古典学の教授となった。公教育を支援する民間団体である教育同盟の民俗学全国委員会の委員長も務め、ブルターニュの民俗に関する論考を発表したり、ブレイス語(ブルトン語)のラジオ番組を担当したりしながら、15年の歳月をかけて『誇りという馬』を執筆した。同書は1975年に出版され、数年のうちに売上げは200万部に上ったといわれる²⁾。1970年代以降エリアスは、西ブルターニュ大学でケルト学講座の教授を務め、1995年に亡くなった。

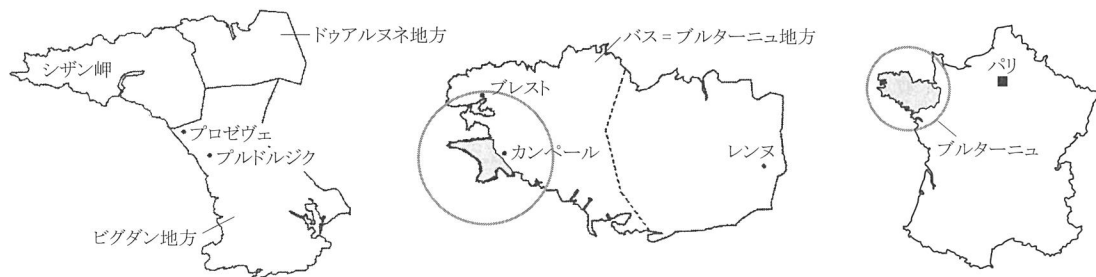
この書物はエリアスの自伝であり、かつ彼が生まれ育ったビッグダン農村のすぐれた民俗誌でもある。とくに、彼が15歳になって村を離れるまでの少年期の記憶が中心に語られている。思い出のなかには家族・親族をはじめさまざまな人物が登場するが、彼らに関する叙述を読んで強く印象づけられるのは、

一人ひとりが独自の尊厳を備えた人物として扱われていることである。それはもちろん、家族的な愛情と豊かな経験知に対する敬意の表れとして理解できる。また、最終章の第二次世界大戦後の時代を扱った部分で、ブルターニュ文化の保存運動が主題になっていることから察せられるように、同書によってエリアスは、ブルターニュ農民の生活を固有の価値をもった文化として記録しようとした。

しかし、この『誇りという馬』から読みとれることは、家族への敬慕の念やそれぞれの人物に表象される文化の独自性だけではない。書名に用いられている *orgueil* という語は、キリスト教の七つの大罪の一つ「傲慢」「慢心」などの訳語がもっとも一般的であることから分かるように、個人の人格に関わる語である。じつはこの語は、エリアスの著書においてキーワードとして使われ、しかもほとんどの場合肯定的な意味で用いられている。エリアスが幼いころ祖父から聞かされた *cheval d'orgueil* という言葉も、本稿で「誇りという馬」と訳しているように肯定的な意味を帯びている。本論でみることになるが、*orgueil* はむしろ農民たちそれぞれが抱く「自尊」の意識を示す語として理解するのが妥当なように思われる。そして、このような自尊意識が農民たちの日常生活、労働、慣習・儀礼、記憶など文化全般との関わりのなかで培われたものであることも、同書で示唆されている。この点で、「由緒」にも関連づけることができそうである。これらの問題は、第II章で具体的に検討したい。

さらに『誇りという馬』の叙述が興味深いのは、そのような自尊の意識が徐々に変化していく過程や、転換していく契機についても読みとることができる点である。この点に関しては、第III章でとくに世代間の変化の観点から論じておきたい。

図 ビグダン地方（バス＝ブルターニュ）の位置



典拠：Guide découverte 2008. Ouest Cornouaille-Finistère-Bretagne, Ouest Cornouaille Promotion, 2008, p. 2.

第I章ではまず、前世紀初頭から戦間期にかけてのバス＝ブルターニュ農村社会の概容をみておこう。

I バス＝ブルターニュ農村社会

バス＝ブルターニュ地方の農村において農業経営の近代化が始まるのは、ようやく19世紀後半になってからであるが、それは社会構造の大きな転換をともなうようなものではなかった。アンドレ・ビュルギエールらが指摘するように、むしろ農村社会の基本的な構造を維持しながら近代化が進められた点にこそ特徴があったといえる³⁾。

次頁の表からもわかるように、バス＝ブルターニュ地方の農業経営でもっとも多かったのは、5ヘクタール以下の小規模なものであった。19世紀のフランス農村において零細所有、小土地所有がほぼ間断なく増加したことはつとに知られている⁴⁾。この地方も例外ではなく、農民のあくなき土地所有欲が零細農の増加となって現れた。

ところで、アンシャン・レジーム期のバス＝ブルターニュ農村では、「地底」の所有権と「地表」の所有権が分有され、地表権を有するドマニエ domanier が経営をおこない、地底権を有するフォンシエ foncier に地代その他と年貢・賦役を納める domaine congéable という土地制度が優勢であった⁵⁾。ドマニエたる農民は、いつ追い出されるかわからない土地に投資しようとはせず、それがこの地方の農業の後進性の要因になっていた。しかし大革命以後、貴族や都市ブルジョワらフォンシエ(多くは不在地主)がこのような生産性の低い所有制度を嫌って売却や貸し出しを望むようになり、他方で農民の土地所有欲の高まりを受けて、この独特の制度は徐々に衰退

していき、20世紀になるとほとんど姿を消してしまった。

19世紀後半から進展した農業経営の近代化は、飼料作物の導入と休閒地の廃止、畜産の拡大を主たる内容とし、後述のように機械化は世紀転換期を待ってようやくはじまった。しかしこの「農業革命」(バーガー)は、イギリスや他の地方で見られたような土地の集積にはつながらず、生産技術の革新が伝統的な複作経営のなかに吸収されるかたちで、小・中規模の家族経営をむしろ強化することになった⁶⁾ [表を参照のこと]。

そして、市場より家族の生存を重視する農業経営が、全国平均に比してかなり遅くまで続いた人口増加を、とくにフィニステール県中部・南部では1900年代まで続いた人口の自然増を支えたのである。なお、表が示すように、世紀末以降、5ヘクタール未満の土地所有は減少しはじめる。これは、零細土地所有者の大半を占めた日雇い農 journaliers が不安定な生活を厭い、新たな働き口を求めてパリやナントなどの都市へ流出したことを示すと推測できる。

農業労働者としては、年雇(住込み農) domestiques もいた。多くは1年契約で、雇い主によって住まいと食事を提供され、契約期間中の生活が保障されていたとはいえ、日雇い農に比べると、雇い主への従属度ははるかに強かった。ただし、日雇い農が都市へ流出し、出生率も低下するにつれて、年雇の立場が強まり、賃金も上昇した⁷⁾。

こうして、20世紀に入っても、バス＝ブルターニュ農村では小・中規模の農民が過半を占め、比較的平等な社会が維持されていた。中規模以上、表では10ヘクタール以上の土地所有に該当するような農

表 フィニステール県における農業経営の規模別件数 (1862~1929年)

規模 (ha)	0~5	5~10	10~20	20~30	30~40	40以上	20~50
1862年	18,302	11,453	7,464	4,201	2,819	1,882	
1882年	47,800	14,921	9,521	5,256	2,197	1,694	
1892年	41,435	14,914	10,149	4,896	1,943	1,546	
1929年	32,840	13,275	17,001				2,332

典拠：S. Berger, *Peasants against Politics*, p. 26.

民は、「大百姓」と呼ばれ、村の政治権力を握る者もいたが、村の儀礼や農作業で特別扱いされたわけではなかった。家族を養うことが最優先され、衣食住すべてに美味しい生活を送るという点では、日雇い農も含めて、大差ない暮らしを送っていたとされる⁸⁾。後述のように、バス＝ブルターニュの農民のあいだで、貧富の差とは別の価値観から個人の序列、集団の秩序が決められることが多かったのも、この比較的平等な関係が前提としてあった。

『誇りという馬』では、ブルドルジク村の農民の階層構成についてまとまった論述はなされていないが、関連する記述から判断すれば、エリアスが上述のような特徴をもつ村落社会で育ったとみて間違いのないであろう。『誇りという馬』には、父方の祖父アラン・エリアスは小屋住みの木靴職人、母方の祖父アラン・ル＝ゴフは日雇い農であったことが書かれている。彼の父親ピエール＝アランについては、結婚前に雇い主の家の「年雇頭グラン・ヴァレ」と呼ばれる、もっとも有能な農夫であったことしかふれられていないが、ピエール＝ジャケズが生まれたときはおそらく日雇い農であった⁹⁾。つまり一家は、村の下層に位置していたと推定できる。

II 農民の「誇り」と由緒

1 口承の歴史

結婚後、エリアスの両親は妻方のル＝ゴフ家に住んだ。そしてピエール＝ジャケズは、両家の祖父、ことにアラン・ル＝ゴフから農民として生きていくために必要な知識や技法、単に農作業にかかわることだけでなく、まさに農民の世界全般についてじつに多くのことを学んだ。『誇りという馬』という書名も、祖父アラン・ル＝ゴフから聞かされた次の言葉から採られている。「貧乏で、代わりの馬が買えなかったって、俺の家畜小屋の囲いにはいつも誇りと

いう馬がいる」¹⁰⁾。祖父と同じ名の先祖アラン・ル＝ゴフの語ったとされるこの言葉には、まさに農民の誇りが雄弁に表明されているといえよう。当時のブルターニュ地方において、馬は、犁耕や荷馬車の動力となる重要な役畜であったが、土地も資力ももたない日雇い農が飼うことはほぼ不可能に近かった。その馬が象徴していた逞しさ・豊かさに自分を擬えながら、力自慢の農夫の気概を唱えた言葉である。

この先祖の話をするときに、祖父アラン・ル＝ゴフが決まって添える家族の歴史があった。それは、1675年にブルターニュ地方で起きた農民反乱「赤帽子の乱 Révolte des Bonnets Rouges」(別名、印紙税一揆)で、ル＝ゴフ家の先祖が二人も絞首刑に処されたことである。この農民一揆は、ルイ14世の王権が設けた印紙税などの新税、および州の臨時税の重圧に反発して発生し、その過程で領主権を制限する要求まで盛り込まれた「農民綱領」が作成されたことで知られている。この農民一揆を研究した二宮宏之によれば、反乱鎮圧の責任者であったブルターニュ州総督ショーヌ公は、ビグダンなど反乱拠点に対して苛酷な弾圧を加え、大勢の農民が処刑されたという¹¹⁾。縛り首にされた人びとのなかに、ル＝ゴフ家の先祖も含まれていたであろう。同家では、この「呪わしき公爵」「人でなし」に対する憎悪が代々受け継がれていた。

貴族に対する反感としては、もうひとつの印象的な出来事も伝えられていた。先祖アラン・ル＝ゴフは19世紀半ば、ギルギファンの館(ランデュデック村)に住むとある侯爵に馬丁として仕えていた。アランが忠節を尽くしたので、両者のあいだには身分を越えた人格的な信頼関係が生まれていた。ある日のこと、アランが自分の部屋用に脚付の柱時計を購入した。それを聞いた侯爵が、自分の所有する部屋でもないところにそのような高価な調度を備えた

ころで何になろう。見栄を張って金の無駄遣いをしている、というような言葉でアランをからかった。怒り心頭に発したアランは、「あなたは、私の時計に対して侯爵なのではない。もしギルギファンのご主人以外の者が同じような発言をしたならば、迷わずそいつの眉間に唾を吐いてやります」と言い放った。侯爵は色を失い、「アラン・ル＝ゴフ、私の眉間に唾を吐いてくれ」とこたえた。アランは、できるかぎり穏やかに唾を吐きかけた。この出来事のあと、両者の関係は以前とまったく変わらなかった。

祖父アラン・ル＝ゴフは、この逸話を話した後、次のような言葉を付け加えた。「この侯爵は、うかつにも他人の領地に足を踏み入れたのだ。決して我慢してはならない。たとえガレー船送りになろうとも、そいつの足を踏みつぶしてやれ。もっとも、ガレー船などもう無いがな」¹²⁾。

また、ピエール＝ジャケズは父方の祖父アラン・エリアスからも農民の矜持に関わる言葉を聞かされていた。「お前や家族が食べていくためなら、粗末な食べ物に向けてでも腰を屈めなさい。だが、決してそれより低く屈めてはならない。たとえこの世で一番偉い奴がお前に命じたとしても、決してそれ以上腰を曲げてはならぬ」¹³⁾。

このような口承の歴史が伝えられる場として、夜の集いの慣行があったことはよく知られているが、バス＝ブルターニュでは第一次世界大戦後、少なくともエリアスの少年期までは、夜の集いが続けられていたようである。晩方になると、女たちは麻を梳いたり、編み物や刺繍、繕いものをしたりしながら、男たちは馬具や農具を手入れし、木材を加工したり、インゲン豆の莢をむいたりしながら、語り手の話に耳を傾けた。使われる言語は、彼らの日常語であるブレイス語である。エリアスによれば、だれでも語り手になれたわけではなく、記憶力や創作力、表現力など、それなりに才能に恵まれている人物のところに自然に人が集まったという。父方の祖父アラン・エリアスがまさにそのような「話上手」であり、ブルターニュ地方で広く信じられていた死神アンターに襲われた人物の話や、イギリス王になったブルターニュ人の話など、家族や村人たちが夢中になって聴いたという。

それぞれの家族の歴史も、このような口承文化のなかに組み込まれていたと考えられる。そして農民の矜持、自尊の意識はこうして口承により受け継がれた家族の歴史に由来していた。このような歴史的な由緒は、口承によるものだけでなく、19世紀のアラン・ル＝ゴフのエピソードにも登場した柱時計、あるいは食器棚、さらにビッグダン地方で一般的であった戸付きベッドなどの調度とそれにまつわる記憶にも支えられていた。

一例として、ブルドルジク村のル＝ゴフ家の祖となったコランタンおじさんのタンスの歴史を紹介しておこう。大革命が終わってある日のこと、いづこからともなく一人の男がランデュデックの街中に現れた。一台の荷馬車に乗って、東の方に向かっていった。荷台には、彼の妻といっしょに、とてつもなく大きなタンスが載せられていた。その巨大なタンスのなかに、ベッドやテーブル、食器を入れた柳行李など、家財道具の一切合切が収まっていた。教区一の大男でも、踵をあげないと扉の鍵穴も覗けないほどの大きさだった。これほど巨大なタンスを入れるような家など、どこにも見当たらなかった。村一番の賢者はタンスを二つに分割するように勧めた。村一番の愚者はタンスを国王に献じるよう勧めた。コランタンはいずれの助言も受け入れなかったので、賢者と愚者はともに、新しい家を建てるよう提案しなした。そしてコランタンは、二人から石ころだらけの丘を半分ずつ購入し、村はずれにとりあえず小さな苫屋を借りた。タンスの方は、坂の途中で荷車から下ろされ、地面に立てられた。翌朝、四方の村々から集まってきた見物人には、タンスはまるで異教の神にささげられた神殿のように見えたという。

石工たちがタンスの周りを石の壁で囲いはじめたとき、この事態がケルサタンの領主ポール・コルニュ（架空の地、架空の人物）の耳に入った。彼は手下の悪魔を送って、ランデュデックの丘で何が起きているのか見に行かせた。そそっかしい悪魔は、人々が聖櫃を収める聖堂を建てているものと勘違いして、夜のあいだに壊してしまおうと考えた。悪巧みに気づいたコランタンは、夜になって悪魔が壁を壊しはじめたとき、突然口笛を吹いて脅かした。気が動転した悪魔がタンスのなかに逃げ込んだとみるや、扉

に鋨を掛けてから、鍵穴に藁を通して聖水を流し込んだ。何たることか。悪魔は、苦し紛れに暴れまわったので、とうとうタンスがばらばらに砕け散ってしまった。ランデュデックの苦屋に今も住まう子孫のところに、銅の鋨を打った柏材でつくられた荷車がある。その板も、コランタンおじさんのタンスの破片である……。

トルストイの『イワンの馬鹿』を思わせる滑稽譚ではある。幼いころ、アラン・ル・ゴフからこの話を聴かされた少年ピエール＝ジャケズは、屋根裏に置かれた二つの大きな柏の木杵、ずいぶん昔に磨かれたらしい、虫食いだらけの木杵の由来についてすっかり得心したという。かつてコランタンのタンスの一部であったはずの木杵の正面に打たれた銅鋨の頭には1867という数字が刻まれていた。ところが祖父によると、そのような文字＝数字はまったく当てにならず、語られる言葉こそ「真実」であり、タンスはもともと1700年以前につくられたものだったのであった¹⁴⁾。

ここではもちろん、アラン・ル・ゴフの口承の信憑性が問題なのではない。このような家財に関する語りを通して、家族の歴史が共有され、メンバーの自己認識の縁よすがとなっていることを確認しておきたい。

関連して触れておくと、家に風格をあたえる食器棚やタンスなどの大きな家具に磨きをかけるのは女性の役割であり、ことに家具に付けられた銅製の飾り鋨などの金具を常に光らせておくことが、農婦たちの誇りでもあったという¹⁵⁾。これも、現代人の清潔の意識とは異なり、家具に備わる富と歴史の象徴性にかかわる習慣として理解できるのではなかろうか。

2 共同性と身体性

農民の自尊意識はまた、共同でおこなわれる開墾、収穫や麦打ちなどの農作業を通して育まれた。開墾といっても、多くの場合、かつての耕作地が荒地に変わってしまった土地をふたたび耕地にもどすための作業が多かったようである。土地の所有者の依頼に応じて、それぞれの農家から家長か年雇頭が加勢し、ときには二人そろって参加することもあった。

雑草、雑木を根こそぎ取り除かなくてはならなかったものであり、大変な重労働であった。この作業では、単に腕力に勝っているだけでなく、大型の鋨マールを使ってうまく障害物を取り除かなくてはならなかった。作業の前には、各自が鍛冶屋で鋨を鍛えなおしていた。エリアスは、かつて年雇頭だった父親から聞かされた開墾の様子を詳しく紹介している。

当日の明け方、開墾される土地に農夫たちが集まった。所有者の差配によって、たくましく威勢のよい者が最前列に並ばされ、「エオム・デイ（かれ！）」の掛け声とともに作業がはじめられた。いったんはじまれば、対面の土手に届くまで休むことなく続けられた。途中、先頭を切って他の者を率いる位置に立った者はそれなりの榮譽に浴することができたので、力自慢どうしの先陣争いが生じることもあった。とはいえ、土を深く掘り返し、根っこを引き抜く作業が短時間に片づくはずもなく、力を按配しながら粘りづよく取り組まなくてはならなかった。

その間、女たちは依頼人の家で振舞われるクレーブを焼いた。昼時になると、年配者、つぎに若者の順にテーブルにつき、娘たちが愛想良く注文に応じた。食事が終わると、真っ黒の顔のまま、ふたたび開墾場にもどった。エリアスが「たとえ金銀を積まれても、夕方まで顔を洗ったりはしなかっただろう」と述べているように、土ほこりで黒くなった顔もまた、農夫の矜持であった。

貧しい農家は、昼間の貴重な労働時間を開墾に当てることができなかったので、夜に月明かりのもとで作業をおこなった。誰もが昼の労働で疲れていたが、加勢を断るものは一人もいなかったという。主人たちが寝に帰っても、年雇頭はとどまった。一同のあいだに、昼の作業よりも対等な関係を楽しむ雰囲気すらあったようである¹⁶⁾。

世紀転換期以降、前述のように複作経営のなかで畜産の占める比重が大きくなりつつあったとはいえ、この地方の農民にとってもっとも重要な共同作業は依然として穀物の収穫であった。ピエール＝ジャケズは1925年ごろ、つまり10歳かそこらのころ、はじめて麦打ちに参加した。以下、彼の記憶にしたがって、麦打ちを中心とした脱穀作業のあらましをたどり、



写真1 麦打ちの光景（ただし、小規模のもの。典拠：Hélias, *Le Cheval d'orgueil*, n. pag.）



写真2 ビグダンの少女たち（20世紀初頭。おそらく女子小学校の光景であろう。典拠：Hélias, *Le Quêteur de Mémoire*, n. pag.）

そこにみられる人びとの関係にも目を向けておく。

ピエール＝ジャケズにとって最初の麦打ちは、叔母（伯母？）ジャンヌの家の中庭でおこなわれた。空が白みはじめたころ、加勢の者が集まりはじめた。女たちはエニシダの箒で庭を丁寧掃除した。庭がきれいになると、道端に止められていた麦束を積ん

だ一番馬車が招き入れられた。馬が荷車からはずされ、轆が上にあがると、荷台が地面に着く。すると、男たちが我勝ちに小麦の束を下ろしては紐をはずし、穂の高さをそろえた。やがて中庭が刈穂でいっぱいになり、準備が整ったことを確認するや、収穫物の所有者が指令を出す。「それ、かかれ！」彼は木靴を脱ぎ捨て、刈穂の敷かれた上を裸足で進み、一番上位の位置を占める。他の者も次つぎ後につづき自分の位置に就く。打ち方の位置は、「能力、評判、親戚関係、日ごろの関係、その人にふさわしいと思われる義務と名誉を考慮した厳格なヒエラルヒー」によって定められていた。彼らは二手に分かれて向かい合い、たがいに挑発しながら気合を入れる。一番手の掛け声とともにその列がいっせいに唐棹を振り下ろす。彼らが一步下がって棹を掲げなおすあいだに、今度は二番手の列が麦穂を打つ。幾度か繰り返すうちに、しだいにリズムが整ってくる。差配役が脱穀し終えたと判断すると、一同はいったん横に退く。脱穀が終わ

ると、女たちの出番である。熊手を振るって麦の藁くずから粒を分け、穀粒を麻袋に詰める。ここは、熊手の扱いに慣れた女の腕の見せどころだった。袋詰めが終わり、地面がきれいに掃除されると、それまでりんご酒で一息いていた男たちが2回目の麦打ちにとりかかる。こうして、午前中におよそ1万

回、午後にも同じくらい唐棹が振り下ろされた。

麦打ちのあいだに、畑では空になった荷馬車に新たに麦束を積み上げる作業がおこなわれた。荷台に麦束をできるだけ高く、しっかりと積み上げるのも熟練を要する労働だった。万一、脱穀場に着くまでに荷崩れするようなことがあれば、積み込み役の農夫は面目を失い、その日はもはや荷台に上がることはなかった。

エリアスによると、その後、脱穀機が導入されることで、麦打ち作業の工程が変化した。機械といっても、最初の脱穀機の動力は4頭の馬であった。4頭が同じ歩調で回るにしたがい、馬の背と棒で連結された動力軸が回転し、歯車を動かして脱穀する仕組みだった。一頭一頭に馬子がついて、足並みをそろえてからスタートした。麦穂の差し込み役は、歯車に穂を入れすぎるとそれを噛んだまま動かなくなってしまうので、平板のうえで均しながら丁寧に穂を乗せなくてはならなかった。

一方で、子どもから大人まで手の空いた者は、脱穀された麦の袋づめ、藁の片づけなど、一家総出で手伝うようになった。荷車から下ろされた麦束を括った藁紐をはずす作業も子どもに任せられた。これを続けていると、爪が痛み、皮はひりひりして、仕舞いには手が硬直してしまうほどであった。それでも、途中で投げ出してしまう子どもはいなかったという。

袋づめされた麦を担って、階段を登り、屋根裏の倉庫まで運び、そこで乾燥のためふたたび袋から出して床に広げる作業、また、脱穀機から出てきた藁を運んで山積みにする作業は、以前と変わらず農夫たちの仕事だった。これらにも、体力と技量が必要であった。とくに周りが見えなくなるほど大量の藁を背負って梯子を登り、藁山を築く作業はバランスよく積んでいかないと、出来上がった藁山が傾いてしまうことがあった。この役を引き受けた農夫は、自負と不安を感じながら作業を進めた。

概略、以上のようなさまざまな作業でそれぞれの農民の能力が試されたのであり、とくに年雇頭は自分の誇りにかけて役目を果たそうとした。通例2、3日かかった脱穀作業が終わると、慰労をかねた夕食（プルゾルン）が用意され、卓越した働きぶりの

者の矜持に応える食事が皆の前に供された。つまり、その人物には格別大きなどんぶりに入ったスープが出されたのであった。ときに、市に出す前の馬の肥育用のどんぶりすら使われた。プルゾルンの席に限らず、どんぶりの大きさはある程度各自のこなす仕事に応じて差がつけられていたのであり、ときには、自分の働きに比べてどんぶりが小さすぎると感じた年雇が床に投げつけ、割ってしまうこともあった。雇い主が彼の意を酌めば、翌日もっと大きなどんぶりが用意されたし、そうでなければ、荷物をまとめて出て行くことになった¹⁷⁾。

「このプルゾルンのテーブルに集う者はみな平等である」¹⁸⁾とエリアスが言うように、労賃を得る日雇い農やその家族はもちろん、中庭や馬を提供した富裕な農民まで誰もが何らかの作業にかかわり汗を流した者どうしの「仲間」意識が強烈にあった。であるからこそ、社会的な階層差とは別次元の、どんぶりの象徴性が意味をもったのであった。とくに、「牛一頭と豚二匹」しかもたず、家族を養うためにわずかの土地を借りて耕す日雇い農がお互いの収穫を脱穀するときには、掛値なしで「徹底した対等性」¹⁹⁾が共有されたという。

このような人格的な対等性は、ある程度は共同の農作業の前提でありながら、それを通して承認され、更新されていくものでもあったとみることができよう。そして、そのような関係において、農民個々の身体性や技量に基づく自尊心が培われていたのである。

エリアスは、脱穀に関する記憶をたぐる際に、その冒頭で世代間の継承性にかかわる重要な場面を回想している。すでに述べたとおり、彼が初めて麦打ちを体験したのはおよそ10歳のころであった。そのきっかけは、祖父アラン・ル＝ゴフが、ピエール＝ジャケズの力と身の丈に合った重さと長さの唐棹をつくってくれたことであった。こうして彼は、「昨日までの子どもだった自分には全く無縁であった道具」²⁰⁾を手にして、麦打ちに参加できるようになったことを知ったのである。とはいえ当日、子どもたちは、大人の列とは別に、庭の片隅に専用の麦打ち場を用意され、作業をおこなった。彼らは、見よう見まねで懸命に唐棹を振り下ろすがうまく打てず、

とうとう大人に手伝ってもらおうという「屈辱」をあじわうことになった。ピエール＝ジャケズ少年は、密かに来年こそ大人の列に連なることを心に期する。しかし、はっきり記されてはいないが、彼は大人の打ち方に加わることはなかったようである。上述のとおり、「唐棹を使った麦打ちの時代はすでに過ぎ去」²¹⁾りつつあった²²⁾。その後、脱穀作業の機械化はさらに進み、15歳になったエリアスがカンペールのリセに進学した頃には、ついに原動機付の脱穀機が登場することになった。

これまで主に男性の身体性と共同性を通して自尊意識をありようをみてきたが、女性に関しても述べておきたい。

エリアスの書の冒頭では、女たちのもっとも重要な共同作業として「大洗濯」^{グランド・レシーヴ}の光景が印象的に描かれている。それぞれの村に洗濯場があり、春（4月）と秋（9月）の年2回、3日間かけて麻のシャツなど布類を一气呵成に洗濯した²³⁾。

また、開墾作業の説明のなかで、農婦の焼いたクレープが昼食に供されることにふれた。このクレープをいかに美味しく、かたちよく焼けるかという技術も女性の誇りにかかわる大切な要素であった。家庭では週1回、だいたい金曜日に食されたというが、開墾などの共同作業の際には参加者全員がその家のクレープを楽しみにしたので、出来損ないは農婦の沽券にかかわった。「上手にクレープを焼くと評判の女は、夫も意のままに操れる」などとクレープにまつわる諺も多かった²⁴⁾。

また前節で、家具を磨くことが女性の矜持にかかわっていた点を指摘しておいた。ブルターニュ女性とモノの象徴性のかかわりといえ、女性の衣装、とくに特徴的な頭飾りにふれないわけにはいかない。この頭飾りを付けた女性は、現在はブルターニュ観光のシンボルとして広く知られている。ブルターニュ内の地方ごとに飾りのかたちが異なっており、ビッグダン地方では、写真2のように、筒型の飾りに特徴があった。エリアスの母マリ＝ジャンヌは毎日冬は6時、夏は5時に起床したあと、まずは頭飾りにとりかかった。半時間かけて入念に組み立てたあとでないと、教会のミサや婚札などの儀式はもちろん、畑や定期市にも出かけなかった。6歳ではじめ

てから、手を火傷した8日間以外、一日たりとも欠かさなかったという。傾いたり、型くずれしたりすれば、「酔っぱらった飾り」に冷やかな視線が注がれた。ほどよく糊づけされ、まっすぐに固定された飾りは、女たちの自負心の拠り所となっていた。

頭飾りは普段は白い布に花模様が刺繍されただけのシンプルなものだったが、日曜日や祭りの日には、モスリン地に刺繍が施された飾りやさまざまなデザインのリースの飾りが用いられた。反対に葬儀の際には、普段よりもっと地味な飾りが付けられた。このように慣習に則りながらも、第一次世界大戦後にはある顕著な変化が生じた。裕福な家の娘たちが飾りの背をしだいに高くしはじめたのである。高くなるにつれて、飾りを固定するために頸に付けるリボンも幅広くなり、デザインも派手になった。貧しい農家の娘も、年長の女たちも流行を追いかけるようになった。頭飾りのファッション性が強まったことは、その衒示的な面が拡大したとも受け取れるが、一方で女たちが旧套から抜け出しつつあったことも示していよう²⁵⁾。

III 自尊意識の変化

第一次世界大戦によってエリアスの伯父ジャンが帰らぬ人となったが、父親ピエール＝アランは生きて前線から戻ることができた。ほどなくして、ブルドルジクの教会の横に戦没者追悼記念碑が建てられ、台石には108人の名前が刻まれた。小学校では、フランス語で言うところの「自由、平等、友愛」^{リベルテ エガリテ フラテルニテ}のために戦った兵士たちの尊い犠牲が称賛された。復員し、村の生活に戻った元兵士たちは、毎年11月11日の休戦記念日には、追悼式でも居酒屋でも主役であり、後方勤務だった者は小さくなっていた。ブレイス語の会話に、やたらとフランス語の文句を交えたがる者もいた²⁶⁾。

伯父ジャンのカーキ色の軍服と父親の軍帽は、母親によってピエール＝ジャケズの通学用の服と帽子につくり替えられた。入学した小学校ではブレイス語の使用は禁止されており、うっかり口にする、放課後に黒板の横に立たされたり、慣れない動詞の活用を言わされたりした。とくに「ヴァシュ(牝牛)」という罰によって、生徒たちは不名誉な烙印を押し

れた。この罰を受けると、小石や木ぎれなどの「ヴァシユ」のしるしを紐で首にかけなくてはならなかった。割れた木靴や動物の骨、ボルトをかけさせた教師もいた。エリアスによれば、この罰によって、本人のみならず、家族まで恥辱を味わうほどであったという²⁷⁾。

19世紀末から、ピエール＝ジャケズが小学校に通った1920年代にかけては、ちょうどフィニステール県の就学率が急上昇した時代であった。社会的要因としては、上述のようにこの時期まで続いていた人口増加により、地元では働き口のない若者が都市に流出したことがあげられる。都市でより有利な職に就くためには、小学校卒業証が必要であった。まだ数は少ないが、エリアスのように都市の中等学校に進学し、より高い学歴を得ようとする者も増えていた。もう一つ、状況的な要因として、当時ビグダン地方のプロゼヴェの村長を務め、下院議員にも選出されていたジョルジュ・ル＝バイユ²⁸⁾がフィニステール県の公教育の振興を盛んに唱えたことがある。彼は、共和国とカトリック教会の対立という全国政治の構図を地域にもちこみ、修道会系の自由学校に対抗する公立の非宗教学校の拡充に努めた。大戦後も、ル＝バイユら共和派（赤派）対カトリック教会派（白派）の対立構図が続き、バイユのお膝元のプロゼヴェでは1928年に修道会系の聖ジャンヌ・ダルク小学校が開設された。このような状況が、就学率を全体としてせり上げていったと考えられる²⁹⁾。

エリアスはフランス語が読めるようになるや否や、『二人の子どものフランス巡歴』を愛読した。この書は、彼の「聖書であり、預言者」となった。学校の書棚には半ダースほどこの本が備えられていたのに、いつも借り出されていたという。大人が子どもに借りてこさせたことも少なくなかったようである。「それは、モラルと良識だらけの、一種の非宗教的な教理問答であり、愛国的で、アルザス、ロレーヌは返してもらおうぞと歌っていた人びとを励ます」内容で、「フランスの一体性と多様性を称揚し……」、「その歴史を伝え、地理を描き、古今の発明を称賛し、職業のこと、大地のことを語」³⁰⁾（傍点は原文イタリック）っていた。

ピエール＝ジャケズは成績優秀な生徒で、試験の

結果、リセ進学のための奨学金が付与されることになった。同じ地元の数名の仲間とともにカンペールのリセに入学したあと、「夢のなか以外では」常にフランス語を話さなくてはならなくなった。フランス語化の進んだカンペールの通学生に、言葉や生活習慣をからかわれながらも、彼らはしだいに順応した。

しかし今度は、彼が帰省したとき、自分を「裏切り者」のように感じなくてはならなかった。麦打ちに参加すると、周囲から「彼はリセに行ってからというもの、焼ける前のパンの本当の匂いなんて覚えてないだろう」などとささやかれた。すでにふれたように、脱穀機が原動機付のものに替わったとき、ピエール＝ジャケズの役割も変わった。この新しい脱穀機には、原動機の操作をおこなう「モーター番」の者が必ずついていた。ところが本来のモーター番がないとき、ピエール＝ジャケズがモーター番の代役を頼まれるようになったのである。なぜなら彼は、「偉い学校」に行っており、相当の知識もっているはずだったからである。実際には、猛勉強で機械の仕組みを学ばなくてはならなかった。脱穀機を操作できるようになると、一同が彼を頼りにするようになった³¹⁾。

ビグダン農村の人びとが都市に出て行く一方で、この地方を観光で訪れる者も増えてきた。目当ての一つは、この地方独特の女性の頭飾りであった。彼らはビグダン女性を見かけると、流行の「コダック」でさかんに写真に撮ろうとした。エリアスの友人は、母親と散歩しているときに、観光客たちがカメラをこちらに向けているのに気づいた。そこで、友人もたまたま持っていたカメラを彼らに向けてやった。この「反撃」が奏功し、観光客は退散した³²⁾。

前章でみたとおり、プレイス語による口承、麦打ち、頭飾りはビグダンの人びとの自尊意識の培われる場であり、拠りどころであった。ここにあげた変化の現れは、19世紀、あるいはそれ以前から継承されてきた慣行や口承伝統、それら由緒に基づく自尊意識が変化を余儀なくされたことを物語っているといえよう。

おわりに

世紀転換期から戦間期にかけて、ビグダン地方の

農村社会には幾つかの重要な変化が生じていた。前章で取り上げた脱穀機のほか結束機、1920年代からは草刈り機やコンバインの導入により農業の機械化が進みつつあった³³⁾。また、都市への人口流出は、同時に教育への関心を強めた。19世紀の前半に全国最低水準だったフィニステール県の就学率は、この時期に急上昇しはじめ、20世紀半ばには全国最高水準に達することになる。共和主義者とカトリック教会との対抗が、この傾向を助長した。また本稿では論及できなかったが、それまで主に浜に打ち上げられる海藻（肥料、また化学工場でヨウ素の原料になった。）の採取で細々と生計を立てていた沿岸部の住民は、缶詰工場の進出によって鰯や鯖の需要が高まったのに呼応して、多くが漁師になり、経済的にも豊かになった。1907年にはプルドルジクにもグリーンピースの缶詰工場が設立された。その背景として、1860年代以降、鉄道網によってカンペールと全国市場が結ばれ、世紀転換期からは鉄道や道路の支線網の整備が進んだことがある³⁴⁾。

このような状況下において、第Ⅱ章でみたような農民の自尊意識は変化せざるを得なかったと考えられる。前章でとりあげた事例を踏まえながら、論点をまとめておく。

まず『二人の子どものフランス巡歴』の受容の例が示すように、歴史伝承の形式が家族や古老の口承から学校で教わる文字の記述と読書へと変化するのにしたがい、ビグダン農民の自己認識において、家族的、地域的な由緒と国民共同体の歴史が交錯したはずである。この地方の場合、口承と文字文化の対照性は、ブレイス語＝日常語と、フランス語＝国民語との対照性と重なっており、両者の関係は一段と複雑であった。さらにカトリック教会・聖職者がブレイス語文化の擁護者であった点も考慮すれば、多様なファクターの交差するなかで両者が接合された、あるいは接合されず、対立したとも考えられる³⁵⁾。

また、脱穀作業の変化を述べた際に言及したように、長らく身体性に結びついていた自尊意識は、農作業の機械化により転換せざるを得なかった。脱穀機の操作を覚えたエリアスが皆の注目を集め、得意な気分になれたことが語られているように、端的に言えば、身体の強靱さと非文字的な経験・技量を備

えた者よりも、学校や図書を通して学ぶフランス語と新たな知識や技術を備えた者の方が優位に立てる社会に変わりつつあった。家々の食器棚の上に、聖人像や結婚写真とならんで、子どもの卒業証書が飾られるようになった光景は象徴的であるといえよう³⁶⁾。

とはいえ、19世紀以前から受け継がれてきた由緒とそれに基づくアイデンティティがいずれ失われていくとは考えられない。母親の頭飾りをカメラでねらった観光客を写真に撮ろうとしたプルドルジクの村人のように、外部＝他者の視線を内在化させながらアイデンティティを組みなおすことになったのではなかろうか。エリアスはカンペールのリセに入りたてのころ、言葉や所作を級友にからかわれ、ときに腕力に訴えて反撃した。「リセで私が受けた処罰の大半は、私より強い、年長の者と血が出るまで殴り合ったせいで科されたものだった……。なぜなら、ビグダンの農民としての尊厳を傷つけるように思われる言葉が発せられるのを決して許せなかったからである」。ここでは、農民の「誇り *orgueil*」ではなく、「尊厳 *dignité*」が問題とされている。ここに、エリアスの自尊意識の変化を読みとることはできないであろうか。あるいは、そのような変化は多くのビグダン農民、とくに若者たちにも共通していたのかもしれない³⁷⁾。

1) Pierre-Jakez Hélias, *Le Cheval d'orgueil*, Plon, 1975, rééd., 2001.

2) Cf. *France-Soir*, 18 septembre 1980, cité in Hélias, *op. cit.*, p. 586. エリアスには、ブレイス語の戯曲や詩集、民話集など多数の作品がある。「誇りという馬」執筆にいたる経緯については、以下を参照。Hélias, *Le Quêteur de Mémoire*, Plon, 1990, pp. 343-347.

3) André Burguière, *Bretons de Plozévet*, Flammarion, 1975, pp. 121-201. Suzanne Berger, *Peasants against Politics : Rural Organization in Brittany, 1911-1967*, Harvard U.P., 1972, pp. 11-32.

4) たとえば、以下を参照。是永東彦「19世紀後半のフランス農民層の動向——マルクス・エンゲルスの小農論の検討——」日高晋ほか編『マルクス経済学——理論と実証——』東京大学出版会、1978年、所収。

5) *domaine congéable* については、二宮宏之「終章 辺境の叛乱——「印紙税一揆」覚え書——」『フランス

- アンシャン・レジーム論—社会的結合・権力秩序・叛乱—』岩波書店、2007年、313-315頁に詳しい。
- 6) 表を作成したバーガーによれば、この地方では3ヘクタール以上ないと一家を養えなかったが、世紀転換期以降これに満たない零細経営は減少傾向にあった。Berger, *op. cit.*, pp. 25-27. ビグダン地方のプロゼヴェエ村を調査したビュルギエールは、家族を養える経営規模の最低基準を5ヘクタールとしている。Burguière, *op. cit.*, p. 107.
- 7) Berger, *op. cit.*, pp. 28, 29. Burguière, *op. cit.*, pp. 33, 106-112.
- 8) Burguière, *op. cit.*, *Ibid.*, pp. 67, 68. Martine Segalen, *Quinze générations de Bas-Bretons : Parenté et société dans le pays bigouden Sud, 1720-1980*, P.U.F., 1985, pp. 289, 290. Berger, *op. cit.*, p. 55.
- 9) 管見のかぎり、父親や家族について直接「日雇い農」という語は用いられていない。しかし、次のエリアスの著書の著者紹介には「土地をもたない日雇い農の両親」という言葉がある。Hélias, *Le Quêteur de Mémoire*.
- 10) Hélias, *Le Cheval d'orgueil*, p. 7.
- 11) この点については、以下を参照。二宮宏之「辺境の叛乱」343-346頁。
- 12) Hélias, *Le Cheval d'orgueil*, pp. 427, 428.
- 13) *Ibid.*, pp. 100-101.
- 14) *Ibid.*, pp. 85-90.
- 15) *Ibid.*, p. 415.
- 16) *Ibid.*, pp. 25-27.
- 17) *Ibid.*, pp. 25, 390, 391.
- 18) *Ibid.*, p. 355.
- 19) *Ibid.*, p. 344.
- 20) *Ibid.*
- 21) *Ibid.*
- 22) エリアスは、子どもの通過儀礼についても各所で詳述している。農作業に関連しては、一輪の手押し車を押せるようになることが第一段階であった。*Ibid.*, pp. 263, 264.
- 23) *Ibid.*, pp. 14, 15.
- 24) *Ibid.*, pp. 395-397.
- 25) *Ibid.*, pp. 419-422. なお、ビグダン地方のジェンダーに関して、エリアスは各所で、女性が家庭や仕事の責任を男性と分担していたことを指摘している。これに対して、社会学者モランは、隣村のプロゼヴェエにおける女性の従属を強調し、戦後になってようやく女性が自律的な行動をとるようになったと主張している。エドガー・モラン『プロデメの変貌』法政大学出版局、1975年、240-267頁 (Edgar Morin, *Commune en France: La Métamorphose de Plodémet*, Fayard, 1967)。この点の考察は、今後の課題としたい。
- 26) Hélias, *Le Cheval d'orgueil*, pp. 63-65, 216.
- 27) *Ibid.*, pp. 200, 211.
- 28) ル=バイユ家はジョルジュの祖父の代からプロゼヴェエの村長を務めつづけ、ジョルジュは1895年から県会議員、1898年から村長、1902年から下院議員に選出され、典型的な地方名望家として活躍した。ジョルジュの時代が「ル=バイユ王朝」の絶頂期であった。Burguière, *op. cit.*, pp. 211-217.
- 29) *Ibid.*, pp. 272-304. エリアスが幼かった頃、G. ル=バイユが父親を訪ねてきた。他に誰もいなくて、突然やってきた「異邦人」にひどく狼狽した。そのときの印象から記憶をたどり、ブルドルジクの赤派と白派の対立についても詳しく述べている。父親ビエール=アランは赤派であった。Hélias, *Le Cheval d'orgueil*, pp. 189-199. また、プロゼヴェエにおける赤派と白派の対立については、以下も参照。モラン、前掲書、268-339頁。
- 30) Hélias, *Le Cheval d'orgueil* pp. 220, 221. なお、『二人の子どものフランス巡歴』については、ジャック/モナ・オズーフ『二人の子どものフランス巡歴』—共和国の小さな赤い本—、ピエール・ノラ編『記憶の場—フランス国民意識の文化=社会史—』第2巻、岩波書店、2003年、所収を参照 (P. Nora (dir.), *Les Lieux de mémoire*, Gallimard, 1984, 1986, 1992)。
- 31) Hélias, *Le Cheval d'orgueil*, pp. 356, 357.
- 32) *Ibid.*, p. 513.
- 33) Burguière, *op. cit.*, pp. 163, 164. Segalen, *op. cit.*, pp. 313-323. この地方でトラクターが普及するのは第二次大戦後のことである。
- 34) Burguière, *op. cit.*, pp. 122-124.
- 35) ブレイス語・ケルト文化の擁護運動については、原聖の一連の研究を参照。原『〈民族起源〉の精神史—ブルターニュとフランス近代—』岩波書店、2003年、ほか。
- 36) Hélias, *Le Cheval d'orgueil*, p. 215.
- 37) *Ibid.*, p. 429. なお最後に、本稿において論及できなかった問題をあげておく。一つに、宗教との関係がある。敬虔なカトリック信者の場合、信仰心と自尊心のありようは緊密に結びついていたと想定できる。また、自尊心とソシアビリテとの関連は独自の領域として問われるべきであろう。カトリック信仰にも関わって、パルドン祭などの儀式は地域住民のアイデンティティにとって重要な要素であった。また、経済面での農業組合、文化面でのケルト・サークルなどのアソシアシオン形成との関わりも看過できない。これらの問題については、別稿を期したい。